

◇現代社会と青年◇

緊張感と

対極にいる若者達

（株式会社キャリアコンサルティング）
代表取締役社長

むろだて いさお
室館 勲



人材育成事業に携わり三十年が経ちます。三十年前は、世の中もいわゆる「スパルタ教育」の傾向が強い時代でした。我々の会でも、縦社会の厳しさが強い傾向にあり、先輩の前では常に緊張して、リラックスとは真逆の雰囲気でした。その分、挨拶や礼儀は見事なものでした。現代の世の中は、教育においてスパルタ的な空気が淘汰されるにしたい、上下関係が希薄になる傾向にあるようです。親子関係も上司部下関係も、まるで友達のような接し方になってきたように感じます。

最近、初対面の大学生数名と話をしている時に、驚くことがあります。ある学生が私との会話の中で、笑いをとるために大げさにボケたのです。まるでお笑い番組に出てくる芸人のようでした。初対面の大人に対して、ボケて距離を縮めるなど常識的にはあり得ません。初対面では、その人の発言が本気なのかウケ狙いなのかはわからないからです。周りは笑っていましたが私は苦笑いでした。最近、私の

前で大げさにボケる学生に対しては、全く乗らずに真剣に「そうですか」と返します。「え？なんで乗ってきてくれないの？」と、逆に学生の顔が引き曇ります。

教育で大切なのは、仲良くすることではありません。大人は大人を、先生は先生を演じることです。妙に若者との距離を縮めたがるのは、指導者側がリーダーとして自立できていないからでしょう。誰とでも瞬時に打ち解ける能力がある若者は、魅力的にも見えますが、一方では馴れ馴れしい奴だと思われかねません。

ドラマ「三年B組 金八先生」でお馴染みの武田鉄矢さんが以前、イマイチ伸びきらない子役について語っていました。それは「撮影現場で妙にリラックスしている子」だそうです。逆に見事に成長していく人は、撮影現場ではガチガチに緊張していたタイプなのだとか。

私も二十代前半まで、あがり症に悩みました。しかし実力をつけて場数を踏むと、大抵のことは慣れ、緊張しなくなった実感もあります。ただ、それでもある時、天皇陛下より御会釈を賜った時はガチガチに緊張しました。それを恩師に話すと、「緊張すべきところで緊張することはとても良いことです」と言ってもらいました。

私も指導者として、実力がついてきた若者には「適切な緊張感を持ちなさい」と指導をしています。常に緩んでいるのではなくて、相手や状況に合わせて、リラックスしたり、緊張感を持つたりできる若者の指導に励んでいます。